慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国際社会で働くための素養
Sub Title	
Author	緒方, 四十郎(Ogata, Shijuro)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2005
Jtitle	人間教育講座 : 社会を知る自分を知る自分を育てる (2005.) ,p.7- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20050000-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国際社会で働くための素養

元日本開発銀行副総裁

緒方四十郎

一九二七年東京生まれ。一九五〇年東京大学法学部を卒業後、日本銀行に入行。同行国際関係統括理事を経て、八六年日本開発銀行副総裁に就任。バークレイズ信託銀行等、内外の著名企業の非常勤役員を歴任した後、日米欧委員会日本副委員長、日米協会副会長を務める。著者の作品には『遥かなる昭和――父・緒方竹虎と私』『円と日銀――セントラル・バンカーの回想』等がある。

国際社会で生きるための素養

ただ今ご紹介にあずかりました緒方でございます。今日のお話自体が私の自己紹介を兼ねておりまして、私の生きてきた時代についてお話ししていこうと思っております。

私は一九二七年生まれですので、今は満七十七歳、この秋に満七十八歳になりまして、みなさんから見ると、ひいおじいさんではないでしょうが、おじいさんのジェネレーションになりまして、非常に変わった時代を生きて参りました。最近『遙かなる昭和――父・緒方竹虎と私』という本を出しました。それから近く、文藝春秋から『昭和と私』という臨時増刊号が出ますが、それに私も少々作文を載せております。今日はそういうことからお話を始めたいと思っております。

戦前

私が生まれました一九二七年というのは、昭和二年です。大正天皇が亡くなったのが一九二六年のクリスマスの日ですから、昭和元年というのはたったの五日か六日しかなかったわけで、昭和二年というのは実質昭和の最初の年に当たります。

その頃日本の経済は大変な不況でした。私は幸いにして、わりと平穏な幼少期を過ごしました。当時としては珍しい男女共学の幼稚園に行き、男女共学の小学校に通いました。家では犬を飼っていて、当時では贅沢ですが、週末には乗馬をしておりました。夏にはどこかに避暑に行くという、恵まれた生活

をしていたわけで、文句を言うことはまったくできません。そういう時代が最初にあったわけです。

ところが、一九三六年二月に有名な二・二六事件が起こります。陸軍の青年将校が反乱を起こしまして、総理大臣は殺せませんでしたが、総理大臣の義弟を殺し、大蔵大臣や陸軍の教育総監を殺し、そして私の父が当時務めていた朝日新聞を襲撃するという事件でした。

一九三七年には盧溝橋事件が中国で起こりました。これは日本と中国のどちらが戦争を始めたのかよくわかりません。当時、日本側は中国側からしかけられたと言っております。ともかく、ここから日本の中国大陸への「進出」――「侵略」とも言われていますが――が始まりまして、当時の言葉で言うと、支那事変が起こったわけです。

当時私は小学生でしたが、学校の先生のところに次々と召集令状というのが来るようになりました。この召集礼状は赤い紙で来るので赤紙と呼ばれていましたが、先生たちは兵隊に行ってしまい、だんだん学校にいなくなりました。たまたま私は吉祥寺にある私立の成蹊学園という小学校に通っていたのですが、ここは私が入ったときには非常に仏教的な教育をしていました。ところが、皇學館という伊勢神宮の近くにある学校の校長が移ってきまして、その人が私の学校の教育を仏教教育から神道教育にすっかり変えてしまいました。それがちょうど、日本が中国に侵略を始めた頃と重なります。日本では、非常時が来たということで、だんだん物がなくなる、自由にものを言えなくなるというような状況のうちに、一九四一年十二月八日に米英両国に対する戦争が始まったわけです。

ご承知のように、この戦争は日本と中国が争っただけではありません。私は東京におりましたし、特に新聞社に勤めていた父親のもとで育っておりましたから、当時、米国や英国と日本の関係がだんだん

悪くなってきていることは、子ども心にも理解はしていました。でも、戦争が始まるとは実は思ってはいませんでした。というのは、日本自体が相当に苦しんでいたし、われわれが見ても米国は非常に大きな国だったからですね。

さらにびっくりしたのは、これは日本からの不意打ちで始まった戦争だったことです。真珠湾攻撃。私はこの戦争が始まったという放送を聞いたときのことを今でも覚えていますが、そのときには日本はすぐに空襲に遭うと思ったのです。そうしたら十二月八日に、日本の海軍の航空隊が真珠湾を攻撃して、アメリカの太平洋艦隊をとうとう全滅させました。その二日後にはマレー半島の先のシンガポール沖で、英国のプリンス・オブ・ウェールズとレパルスという二つの戦艦を沈め、大戦果を得たわけです。これは不意打ちだから当たり前のことなのですが、しかしこれは全世界に衝撃を与えたわけです。日本の中にも戦争に反対する人はたくさんいましたが、そんなこともあり、たくさんの人たちが「ひょっとして日本はかなりいけるんじゃないか」と思い始めたわけなんです。しかし、日本が攻撃したために、かえってアメリカが世界戦争に加わってしまいました。

ご承知かもしれませんが、欧州では英仏対独伊ということで一九三九年の九月にすでに戦争が始まっていました。アメリカは英国をいろいろと援助していましたが、戦争には加わってはいませんでした。ところが日本がアメリカを叩いたために、アメリカは日本に応ずるという格好で英国側に加わってしまいます。従って世界は二つに分かれました。日本側は日本とドイツとイタリア。ところが日本とドイツはものすごく離れています。そして、こう言っては悪いけれど、イタリアはあまり強くない。それまで英国・フランスはかなり弱っていたけれど、そこに米国という強い国が入りまして、大変な経済力をもっ

て日本を打ち始めたんです。

最初には大勝しましたが、その頃になりますと、食糧などがだんだんと不足してまいりまして、配給制度になりました。やたらと今のように店屋に行って物を買うことができないわけです。「お米は一日にいくら」というように割り当てられて、もちろんお金は払うんですが、当時はまだ闇市というものがなかったものですから、買えないような状況でした。そのうちに私どもの先生だけではなく、上級生なども兵隊に行かせられるようになりました。私のところでも、兄が会社員でしたが、そこに赤紙が来て、兵隊として戦争に行かせられるというようなことがありました。

さらに一九四四年頃になると、米国のB29という爆撃機が東京周辺を爆撃するようになりました。私がおりました成蹊学園は吉祥寺駅の北側にありまして、学校のそばには中島飛行機の工場がありました。そこは米軍の爆撃の標的になっていました。サイパンなどから来るB29の編隊は、まず富士山をめがけてきて、富士山の東にまわって、まっすぐに来ると、中島飛行機があります。中島飛行機を通り越すと、成蹊学園がある。私どもは学校で学校工場というのをやっておりまして、軍隊のために電話の組み立てなどをしていたのですが、中島飛行機の工場が爆撃にあうと、しょっちゅう消防に当たらさせられていました。私はかなり遠くに住んでいたのですが、学校の近くに住んでいる人は、爆撃があって火事が起こると、学校の消防に、もうちょっと遠い人は消防署に駆けつけて、火を消しに行かなくてはいけません。まず敵機が来たというと、すぐに消防署に集められます。そして、第一波の空襲で中島飛行機の工場で火事が起こると、すぐに消防自動車がものすごいサイレンをたててその現場に行きます。消防自動車が着くと、第二波の攻撃が始まります。そこで防空壕に入って、それを避けるというような

具合です。そのときの、だんだんと爆弾の落ちる音が自分のいるほうに近づいてくる、ひょっとしたら私のいる防空壕に落ちるんじゃないか、という怖さはに未だに忘れられません。

そのうちに、アメリカ側の攻撃は、われわれの家庭にも及んできました。私は戦争が終わる三カ月弱前に、東京の大久保と新大久保の間のところで丸焼けになって、家を失った状況でした。米軍は爆弾ではなくて、焼夷弾という、日本の木造の家を簡単に焼くような爆弾を落としたわけですが、そのときの恐ろしさも忘れられません。

私の父は新聞社をやめて、戦争の終わり頃には内閣に入っていましたが、日本が負けかけて努力をしていることを、いろいろと聞いておりました。一九四五年、つまり戦争に負ける年の三月頃に、密かに当時重慶にあった蒋介石政権と和平を結ぼうとして、失敗したなどということを聞くたびに、戦局の見通しにだんだんと不安感を持ってきていたわけです。ご承知のように、その後、原子爆弾が広島と長崎に落ちました。それからそれまではドイツだけを占領していたソ連が、日本が弱くなったのを見計らって満州に攻め込んできます。そういう状況のもとで、一九四五年八月十五日に、日本はポツダム宣言という連合国側の無条件降伏を求める宣言を受諾することになりまして、私どもは、今の天皇のお父様である昭和天皇がラジオで放送されるのを聞きました。

終戦後

そういう状況で戦争は終わりましたが、それから大変な変化が起こったわけです。二週間ぐらいの間

に、米軍が東京に進駐してきました。それで何が起こるかわからないということで、年頃のお嬢さんがいる家ではお嬢さん方を疎開させたこともあったのですが、最初に来た米軍は、一番強い米軍が来たということもあるのでしょうが、規律が非常にきちんとしていました。きちんとしていた上にですね、面白いことに非常にリラックスしていたことです。

ここで二つばかりエピソードを申し上げましょう。私は麻布の広尾に住んでいまして、当時、信濃町のほうから七番という都電、いわゆる路面電車が走っていました。それが英国風の電車でブレーキのかけ方がとても面白いんですね。信濃町から乗った米兵が、自分でやってみたくなって、都電の運転手をどかせて、自分で運転しました。そして基地下の坂のところでブレーキをかけます。これが彼らにとっては面白くてし仕方がないのです。そこで電車を止めると、さっと降りて、墓地の裏にあった自分の兵舎に行ってしまう。それでわれわれはホッと胸をなでおろして、電車に乗るというようなことがありました。

一方、米軍のいるところでは入口に歩哨が立っています。歩哨は年がら年中チューイングガムを噛んでいて、まったくリラックスしているわけです。日本の昔の軍隊はそんなことがなかったんです。これを見て、これは物質の点だけで負けたわけではないと思いました。スポーツでもしょっちゅう緊張していると、肝心なときに力が出ないでしょう。米兵はチューイングガムを噛んでリラックスしているのだけれど、いざと言うときになると違っていました。

われわれの生活にも大きな変化がありました。まず食糧が足りなくなった。学校は始まったのですが、食糧休暇というものがあったり、政府の力で食糧を配給する制度がだんだん崩れかけまして、闇市が各

地にできて、そこでお金を出せばいろいろなものが買えるというような状況で、その間に物価がどんどん上がる、苦しい状況でした。

もうひとつの変化はメディアです。戦争に負けかかっても、日本の軍部は威張っておりましたから、新聞も「和平を結んだほうがいい」なんていうことは書きませんでした。戦時中には、日本中が「一億人が全部つぶれるまで頑張らなくてはいけない」というような調子だったわけです。それが戦争が終わりますと一転して、日本中の人が「やはり平和がよかった」「やはり民主化がよかった」「自分は昔からそう考えていた」と、そう考えていない人までもがこう言い出したわけです。ちょうど私が旧制高校の頃でして、本当に混乱しました。

一方では食糧がなかなか手に入りません。うちでも兄弟をさしおいて先に食ってはいけないというような状況で、外の新聞を見たり、ラジオを聞いたりすると、世の中ががらっと変わっています。今までは戦争を遂行しろと書いていた新聞が全然違うことを書いています。ラジオも変わるというなかで、私は大学生活を終えました。

日本銀行入行

当時戦争が終わって物がない状況で、物価はどんどん上がり、インフレがひどくなっていました。一九四九年、まだ占領中に、米軍がジョゼフ・ドッジという総司令官顧問を日本に派遣しまして、財政の赤字を減らす厳しいデフレ政策を導入しました。これは、物価を抑える政策です。その頃は一ドル＝

三六〇円です。一ドル＝三六〇円と言うと、今は一ドル＝一〇五円ぐらいだから、みなさんびっくりなさるかもしれませんが、一ドル＝三六〇円という日本の円とドルの間の関係を設定したわけです。

そのときに、私は日本銀行に入りました。なぜ入ったかはよくわからないのですが、ひとつにはその頃の社会背景があるかもしれません。役所は給料が少ない。大きな銀行や会社は、アメリカの命令で、例えば三菱重工業は東日本重工、中日本重工、西日本重工の三つに分かれました。三井物産や三菱商事もいくつかの会社に分かれた状況だでしたが、幸いにして分割を強いられなかったのは日本銀行だけでした。なぜかと言うと、日本銀行券を発行しているところだから、さすがのアメリカも分割しなくていい、ということでした。そこを受けて、うまく受かったわけです。

うまく受かったひとつの理由は私の名前かもしれません。私は四十郎という変わった名前ですが、これはどうしてかというと、私は末っ子で、私の親父が四十歳のときに生まれたからです。面倒くさいから「四十郎」と名前をつけたそうなのですよ。私はこの名前が嫌でした。幼稚園のときには他の友だちは「太郎」とか「まさお」、「花子」とか、ちゃんと簡単な名前で書いてあるのに、私のだけは昔の書き方で「しじうらう」と書いてあります。小学校の先生は時代劇の俳優みたいだと言っていました。それでずっと嫌だったのですが、日本銀行の試験を受けたら、試験官が一番最初に何を聞いたかというと「君は変わった名前だけど、どうしてこんな名前なの」ということだったのです。この質問には一万遍くらい答えていますから、すらすらと答えられて、たちまち採用してくれました。それ以来、この「四十郎」という名前には非常に愛着を感じております。私の顔は忘れても、「ああ、四十郎君か」と言ってくれるような状況になったわけですから。

留学

したがって、日本銀行に入ったときは占領中です。まだ講和条約が結ばれていなかったのですが、入った年の六月に、北朝鮮が朝鮮半島の南側、韓国を攻撃し始めました。つまり朝鮮戦争が起こったわけです。ちょうどその頃、私は働き始めていましたが、やはり就職したときから、「日本の中にいたのでは、どうも視野が狭くなるのではないか」と感じており、敢えて留学しようと思いました。

当時は日本の政府も企業もみんな貧しかったので、政府や企業から留学した人はいません。そんな状況でどうして私が留学できたかというと、米国のフルブライトの留学制度のおかげです。これは非常に感心するんですが、米国にフルブライトという上院議員がいまして、彼は若いときに奨学金をもらってオックスフォード大学に行っていました。これは非常に有名な奨学金で、セシル・ローズという英国のアフリカを開拓した人の遺言でできた留学制度です。その留学制度のおかげで、フルブライト氏は若いときにオックスフォード大学で学ぶことができました。フルブライト氏は戦後、議員になります。最初は下院議員で、後に上院議員になったのだと思いますが、そのときに彼は「今後の世界はやはり人物交流だ。旧敵国の人もアメリカで勉強させなくてはいけない」と考え、法案を立案して、フルブライト法というのができたのです。これはどういうものかと言いますと、アメリカはいろいろな国や地域を占領して、お米や何だといろいろな財産を持っています。例えば日本にあるアメリカ政府の財産は日本で売りますね。すると円が入ってきます。それを積み立てて、私ども留学生の制度に使ったわけです。

私はフルブライト留学生としてアメリカに行きました。ところがよく冗談で言うのですが、私は決し

て〝fully bright〟ではない、〝half bright〟なんです。せっかくフルブライト上院議員の奨学金をもらったのだけど〝half brighter〟で終わった、ということです。フルブライト上院議員が日本にいらしたときに、「私は〝half brighter〟だ」と自己紹介したところ、笑っておられたこともあります。その後、未亡人がみえたので、「私はせっかくフルブライトの奨学金でアメリカに留学したんだけれど、〝half bright〟だ」と言ったら、奥さんは非常に喜ばれました。自分の主人もベトナム戦争に反対したために、ジョンソン大統領から「お前は〝fully bright〟ではない。〝half bright〟だ」と言われたのだそうです。それでは、私もやっとフルブライト上院議員の域に達したか、と思いました。

アメリカに留学して、見るもの聞くものもみんな珍しく、大変にいい勉強になりました。もちろん英語では大変に苦労をしました。というのは、みなさんはそんなに悪い教育を受けてはいないと思いますが、われわれの頃の大学教育は講義だけでした。質疑応答がありません。私はたまたまゼミに入っていましたが、ゼミに入る学生はごく少数でした。

それから私がいた大学では宿題はさほどありませんでした。ところがアメリカの大学院に行ってみると、まるで私らが中学校で経験したように多くの宿題が出ます。本は読んでこなければいけませんし、レポートなどを書かせられます。それから質疑応答もあります。最初の頃は何を聞いているのか、さっぱりわかりませんでした。何を先生が答えているのかもわかりません。特に困ったのは、先生が言い間違えたときです。私どもは内容で聞いてはおらず、言葉で聞いていました。例えば、私はどちらかというと経済のことを学びましたが、先生が喋ってるうちに〝輸出〟と〝輸入〟の単語を言い間違えることがあります。一生懸命に聞いていると、どうやらあの先生の言っていることはおかしいとわかってきま

す。ところがアメリカ人学生は、先生が間違えているのがわかっているし、言葉ではなく意味で聞いていますから、先生が言い間違えても通じるわけです。とにかく勉強して日本に帰ってきました。

帰国後

実は私の就職先の日本銀行は、行員が海外に行くことをあまり奨励してはいませんでした。というのは、非常に保守的なところでして、留学をするよりは内部で一生懸命働いて、そのうちに選ばれて海外の事務所で勤めるほうが出世街道だ、という考え方が強かったのですが、私はかまわず留学しました。

帰ってきてみたら、私の予想がうまく当たり、日本銀行もやはり国際的な変化の波に晒されることになりました。しかし留学を奨励していなかったため、留学をした人もほとんど少ないわけです。そこで私がアメリカに行っていたことを、非常に重宝にされまして、アメリカから帰ってきてから三十年間ぐらい日本銀行におりましたが、ほとんど大部分、国際関係の仕事をしてきました。

ちょうどその頃の日本はひとことで言いますと、輸出を伸ばして先進国に追いつこうという目標が非常にはっきりしておりました。いろいろな官庁も、会社も本当に一致して、国をあげてその目標に向かって頑張っていました。日本は最初の頃は国際収支が悪く、日本の景気が二、三年ごとに過熱すると、輸入が増え、物が国内で売れるから、輸出が伸びず、輸出入の差額が赤字になってしまいました。つまり輸入超過になったわけです。そこで日本の政策当局は金融を引き締めて、場合によって為替管理をしました。為替管理というのは、ご存知ないと思いますが、外貨の売買を制限したりすることで、いち早く

日本の外国との関係を建て直すことによって、そのうち黒字国に戻るということを、くり返しくり返しやっていたわけです。

日本にはそういう意味で動く余地が非常に少なかったわけです。その頃の私どもの言葉では〝国際収支の天井が低い〟と言っておりました。もっとも、天井が低いから十分なことができなかったわけですけれども、一生懸命我慢してやってきたわけです。

私がその間にどういうことをやってきたか、簡単に申し上げましょう。私が帰ってきたのが一九五六年ですから、一九六八年の始めまでは、日本は二、三年ごとに輸入超過になったり輸出超過になったりを繰り返していました。ところが、一九六八年の春から急に日本の輸出が伸び始めました。外国からいろいろな資本が入ってくるので、日本が黒字になったのです。しかし長い間の赤字で貧乏性がこびりついていましたから、私どもはこの黒字は一時的だと思いました。けれども、実はこれが日本が黒字国になった始まりです。これ以後日本が赤字になったのは、一九七三年のオイルショックのときだけです。

そうなりますと、一ドル＝三六〇円という相場が少しおかしいのではないか、一ドルがもっと低くてもいい、円がもっと高くてもいいという議論が起こってきます。円が高くということは、一ドルが二〇〇円なり、一五〇円でいいということですね。そういうことがありまして、私の三十年にも及ぶ日本銀行のひとつの流れは、円とドルの関係を三六〇円から二〇〇円へといかに波乱なく移行させていくかということになりました。一番大きな事件としては、一九七一年八月にニクソンショックがあって、日本はそこで一ドル＝三六〇円をあきらめるという事態になりました。それから一九八五年九月にプラザ合意があり、当時一ドル＝二四〇円ぐらいだったものが、その後一気に円が強くなりました。この後

一ドルが一〇〇円台になって、現在の一〇五円に及んでいるわけです。もちろん途中で八〇円になった時代もあります。私はそういうことに関与しておりました。

また、日本の経済が強くなるにつれて、日本のことばかり考えているわけにはいかなくなりました。やはり外国で困った国があれば、これに協力しなければいけません。それでお金で協力することになります。例えば英国が困っていれば、日本からお金を貸します。フィリピンが困っていれば、フィリピンに貸します。メキシコが困っていればメキシコに、ということの担当をしてきました。

私は一九八六年九月に日本銀行を辞めました。要するに勤め始めたときは占領中で、円も一ドル＝三六〇円で非常に貧乏だった日本が、だんだんと経済力が強くなり、その結果、私が辞めるときには、日本円と米ドルとドイツマルクの三つの通貨が三大通貨と言われるようになっていました。

感想

そのような道筋で、現在は第一線から引退し、その後もぶらぶらしています。最近長生きになっているものですから、いろいろと思うことが多くあります。あまり古いことまで遡ると時間がございませんので、一番最近の感想を申し上げます。

一九五六年に私がアメリカから帰ってきてからの五十年余りを分けてみますと、ちょうど一九七〇年の大阪万博の頃の前と後で、日本の流れに大きな変化があるような気がします。というのは、大阪万博ぐらいまでは、簡単に言うと、日本は赤字国時代でした。日本の経済がちょっと景気がよくなりすぎると、

すぐに輸入超過になり、あまりそういう状況を続けられない時代でした。そういう時代ですから、先ほど〝国際収支の天井が低い〟と申し上げましたけれど、われわれも謙虚に外国の政府、あるいは国際機関の言葉に耳を傾けていました。それから景気の過熱を抑えて、国際収支を直す、輸入超過を直すときには進んで手早く処置をとるということで、日本は模範的な赤字国、模範的な新興国になりました。そういう時代が一九七〇年までで、その境目はその大阪万博だったような気が私にはするのです。大阪万博とは直接関係はないのですが、時代的に、ということです。

その後は先ほど申し上げたように、一九七三年に第一次石油ショックが起こったときに、石油の値段が非常に上がり、日本は一度赤字国になりますが、それを除いては、ずっと輸出超過の時代が続いています。それはなぜかというと、日本の工業の国際競争力が強いからです。自動車や電子機械をはじめとする日本のものが、海外で売れる。それから円も強くなるから、海外で売られているものが安く買えるようになるわけです。

ところが私が省みたところ、黒字国時代になってからは、いろいろと日本の状況がうまくいかなくなっているような気がして仕方ありません。どういうことかと言いますと、だんだん奢りが生じてきたように感じられるのです。つまり戦争が終わったとき、食べ物がないような時代から、だんだんと日本は立ち直ってきました。これは日本の制度、政策、慣行が優れているからではないかと、みんなが思ってきたわけです。たまたまエズラ・F・ヴォーゲルというハーバード大学の先生が『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（Japan as NO.1）という本を書きました。それが日本でも翻訳され、それを読んだ多くの人が「そうか、アメリカの学者も〝ジャパン・アズ・ナンバーワン〟と思っているのか」と思いました。

ちょうどこの時代、日本の企業は、もちろん海外でお金を借りたり調達したりすることができましたし、またその必要もあったんですが、日本の政府、国としては、外国からお金を借りる必要がまったくなくなったわけですね。お金を借りる必要がなくなったということは、日本の政策当局は、外国の忠告に耳を傾ける必要がまったくなくなったというわけです。この奢りが、私はバブルを引き起こしたのだと思います。つまり、いろいろなところに非常に楽観的な需要見通しを立てて、どんどん建物が建っていったこと、それから土地の値段が必ず上がるんだという予測のもとにお金を借りることでバブルが発生しました。そして一九九〇年以降、これが逆目に出まして、バブルが崩壊したというわけです。その後時々景気が回復しますが、どうも停滞しているような感じが続いています。

私は、日本が非常に貧乏していた時から国際関係に関わっておりましたので、いろいろな人に会いにいきます。今でも国際会議などに行っていますが、最近は日本の評判は非常に悪くなっています。数年前ですが、〝Financial Times〟というイギリスの非常によい新聞の論説副主幹が私のところに来まして、こういうことを言いました。「日本は図体のでかい小国だ」と。よっぽど「あなたのところは図体の小さな大国か」と言ってやろうかと思ったんですが、よく聞いてみますと、彼が言うには「四百年前を見てみろ」と。「四百年前にお前の国は何をしたか。鎖国をしたじゃないか。四百年前に英国は世界に雄飛しはじめたんだ。日本は図体の大きな小国なんだから、そんなに大国になるようなことを無理にしようとしなくてもいいんじゃないか。統計上は大きいから必ずG7ぐらいには呼んでくれるよ」と、罵詈雑言を吐かれたわけです。これにはうまく答えられないような状況でしたね。

もうひとり、私の友人で、日本語のうまいアメリカの外交官で引退した人がいまして、東京の芝のア

メリカンセンターで講演したときに、この人がまた、ややアクセントのある日本語で「日本人は一体何を考えているんだ。何も考えていないんじゃないか」と言ったわけです。確かに日本人はあまり意見を述べません。述べる人はいますし、慶應にはおられると思いますが、世の中には言わない日本人も多いから、何を考えているのかわからない、と言うのです。要するにどうも自分の考えがなく、あってもはっきり言わないわけです。それが、世界で馬鹿にされてきた理由ではないでしょうか。

七つのお願い

私は私なりに努力していますが、何と言っても七十七歳で、もう先が見えています。そこで、みなさんにぜひお願いしたいことがいくつかあります。それをこれから申し上げたいと思います。ただこれはひとつの意見ですから、鵜呑みにしないで聞いてください。

一　知的好奇心

ひとつはどんなことでも知的好奇心（intellectual curiosity）を持ってほしいと思います。みなさんは理工学部所属で、それぞれこれから志す専門も違うでしょうし、それから理工学部でない人もいらっしゃるかもしれません。けれど、何事にも知的好奇心をもってほしい。そして何事についても「ハテナ」と思ってほしい。特に、自分たちがこれまでに接触したことのなかった異文化に直面した場合にも、それについて真っ正面から「ハテナ」と思い、好奇心をもってほしいと思います。これが第一点です。

二　他人の意見に耳を傾ける

第二番目は、これは非常に大事なことですが、他人の意見に耳を傾けてください。これは例えば他人の意見を聞いているときに、「もう、この意見はつまらない」と思っても、聞き上手になることが大事です。適度に相づちを打って、相手の話すことをできるだけ話させるということ、これは非常に大切なことだと思います。言わせるだけ言わせて、それでわからないところがあったら、遠慮なく質問をしましょう。これを日本の人はあまりしません。

例えば私が大学生のとき、授業は講義ばかりで、講義のときに「質問は？」と言われても、そこで質問をする人はいませんでした。全然質問しないか、質問をする人は先生が出て行くときに捕まえていました。これは今の日本の記者会見で見てとれます。質問するのは大抵記者クラブの幹事で、他の人はあまり質問をしません。そのひとつの理由は、質問して答えが出ると、他の新聞も書いてしまうからです。自分だけ質問したいので、外で待ちかまえている人がいます。けれど、結局面倒くさくなって質問しない人が多いから、日本人は質問しないと言われます。ぜひ質問をしてほしいと思います。

私には兄がおりまして、あまり大したことを言わないのですが、ひとつ、兄が言っていることで感心しているのは、「日本の学生は、教わったことを覚える能力については世界一だ。しかし質問を作ることは世界で一番遅れている」と、盛んに言っています。それは非常に当たっている点があると思います。ぜひ質問を考えてください。

三　自分で考える

第三点はもっと大事なことで、自分で考えて欲しいということです。自分の頭で考え直しましょう。「誰かがこう言ったからこうだ」、「緒方がこう言ったからこうだ」ではなく、「緒方が言ったから、却っておかしいのではないか」というふうに展開してほしいと思います。

それからもうひとつは、やはり常に問題意識やテーマを持ってほしいと思います。こういう話を聞いたことがあります。リチャード・クーパーというハーバード大学の経済学者がいますが、彼がこう言っています。ハーバード大学にも経済学を勉強して、よくできる日本人学生がいます。まずBA（Bachelor of Arts）を取って、さらにMA（Master of Arts）を取った人が、クーパー先生のところに何を聞きにくるかというと、「私は今度Ph.D.のコースに入りたいと思うんですが、何をテーマにしたらいいのでしょうか」と聞くのだそうです。それで先生は呆れて、「Ph.D.のコースに入る人が、何をテーマにすればいいのかと聞きに来るのは非常に驚くべきことだ。要するに、経歴や学位のためにPh.D.のコースに行くのであって、何かテーマがあってやろうとしているのではないのではないか」と言っていました。私が「どこか他の国で似ているところがありますか」と聞いたところ、先生はしばらく考えて「韓国の人が比較的と近い」とおっしゃっていました。とにかく、そういうテーマをもたない日本人が多いようですね。

それから、よくできる日本人留学生はいるけれど、非常に狭く、深いということです。それはおそらく、知的好奇心がバーティカルにしか動かないというようなこともあると思います。ですからやはり自分で考えて、テーマや話題を持つことが重要だと思います。私は『遙かなる昭和』にも書きましたが、日記

を書くことも一案です。何も毎日日記を書く必要はないけれど、何かちょっとしたテーマをどこかに書いておけば、話題を持つことができます。話題があるということは非常に大切なことで、常に考えることができるようになります。これが今申し上げたいことの三つめです。

四　わかりやすく発言・質問する

四つめに申し上げたいのは、これはさらに大事ですが、できるだけわかりやすく発言することです。よく日本人は謙譲の美徳を発揮して、「沈黙は金である」と言いますが、結局何も言わないと、何を考えているのかわかりません。しかし、では発言をすれば何でもいいのかということではありません。質問をするにしても、意見を述べるにしても、できるだけ簡潔・明確・的確に話すことが必要です。英語で言うなら articulate に話すことが大切だと思うのです。別に後から出る質問を予防しているわけではないのですが、よく何を聞いているのかわからない質問が出ることがあるので、何がポイントかをはっきりさせる必要があるのと思います。

その関係で、私は外国語を学ぶことが非常に有益だと思います。昔ドイツにゲーテという詩人がいて、ゲーテは「外国語を学ぶことは自国語を学ぶことだ」と言っています。外国語を学ぶとき、自国語がよくできないと外国語も理解できないというわけです。

先日ある会合で、小学校から英語教育をした方がいいか、という話がありました。出席者の半分くらいの人たちが「日本語と英語と両方やると、頭が混乱するのではないか。まず日本語を覚えてから英語を覚えたほうがいい」と言っていました。私はいろいろな人に聞いたのですが、二、三カ国語を若い頃

からやったからと言って、混乱するケースはないわけではないけれども、少ないのだそうです。ですから、やはり外国語で何を言っているのかわからない人は、日本語でも何を言っているのかよくわからない人が多いということです。要するに、考え方がはっきりしていないからですね。発音や文法がどうだということもありますが、それよりも内容です。

こういう話があります。私が一九六二年にロンドンに赴任するときに、上役にこう言われました。日本銀行は、日露戦争のときにロンドンにオフィスを作って、戦時中に閉鎖して、戦後一九五一年ごろに開きました。その頃はとにかく世界戦争で負けた東アジアの小さな国の中央銀行が事務所を出すのだから、ということで、手紙を出すときには英語の手紙が立派でなくてはいけませんでした。変な英語を書いたら、何を書いているのかわからないと言われるから、と英語の表現にも非常に気をつかったそうです。しかし私が行く頃には、日本はそれなりに復興を始めたわけですから、その上役は私にこう言いました。「これからはむしろ内容なんだ。内容がしっかりしてなくては駄目なんだ」と。

みなさんの時代はそれからもう四十年以上も経っています。語学は難しいけれども、頭がはっきりとしていれば、いろいろな言葉をある程度学んだ後、うまく表現できるのではないかと思います。articulate に発言するために、日本語も大事だけれども、外国語も同じく大事だということを忘れないようにしていただきたいと思います。

五　余裕をもって物事に対処する

いろいろと申し上げてきましたが、五番目は、ぜひ余裕を持ってものごとに対処してほしいというこ

とです。とは言っても、いつもいつも余裕を持って対処することはできませんが、ひとつの方法として、私が自然に試みているのは、なるべくどんなときにでも冗談を言おうとすることですね。冗談を言うことは非常に大事なことです。よく「アメリカ人はスピーチをするときに冗談から始め、日本人は弁解から始める」と言われます。日本人は「私は英語が下手です」から言い始めるということです。これはよく言われます。だから、なにも全部の話に冗談を言う必要はないけれど、心に余裕をもって、いきり立たないことが非常に必要ではないかと思います。

今、例えば日本と韓国、日本と中国の間でいろいろなことがごたごたとしていますが、最も心配なのは、両国でいきり立つと止まらなくなってしまうことです。こういうときに対処するには、どういう冗談を言った方がいいか、ということを常々考えて対処した方がいいと思います。みなさんも学問やそれ以外のことで議論をされるときには、余裕を持ってやっていただきたい、というのが五番目でございます。

六　大きな常識をもつ

六つ目にお願いしたいのは、大きな常識を持ってほしいということです。これは言うのは楽ですが、非常に難しいことです。

ひとつこういう例があります。若いときは学校で先生から教わったことをその通りに守っていれば、問題は大体起こりません。ところが中学に行き、高校に行き、大学に行きますと、学校で教えられなかったこと、あるいは学校で教わったことでは律しきれないようなことに直面することがあります。そのと

きにどうしたらいいでしょうか。

簡単なことから言いますと、会社で仕事をしていて、会社の中であまりよくないことが起こったときに、それを外に向かって内部告発をすべきかどうかということがあると思います。私らも小学生のときに電車の中で暴れると、先生に言いつけられることがありました。私が行っていた成蹊学園には、外国から帰ってきた生徒のための特別学級があって、そのクラスの生徒がどうやら「緒方ってやつが電車の中であっちに行ったり、こっちに行ったりしていた」と言いつけたようでした。私らの仲間は当時、そういうことをしませんでした。これもある種の内部告発ですよね。こういう内部告発をした方がいいのか、悪いのか。これは非常に難しい問題で、具体的な例がないと、何とも申し上げられませんが、やはりそう言うときに「ここは庇うべきか」「ここは隠すべきか」「ここは堂々と言うべきか」、これらは常識で判断しなければいけないと思います。

もうひとつ、最近こういう問題もあります。長い間、日本の行政などは役所の役人の自己裁量で決まっていた部分が非常に多く、法律も戦前のものはカタカナで書いてあって、あまり細かいことまで書いていません。書いていないから、解釈の余地が非常に広いわけですが、最近はまず法律は平仮名で作られます。それに最近ではマニュアルというものができまして、何か事故が起きると、そのときにマニュアルがなかったことが非難されます。マニュアルがなければ人間は生活できないような状況になってきているということ、私はこれはちょっと行き過ぎじゃないかと思います。

この関連で思いつくことは、携帯電話の存在です。昔、われわれが働いている頃には、上の人が昼飯の会合などに行くと、その人とは連絡がまったくつきませんでした。ですから、一番偉い人が出かけて

しまったときには、二番目の人が上の人にかわって裁くことによって、だんだんその人が成長していきました。今はどういうことが起こっているかというと、私の邪推ですが、何か起こると、何でもかんでも上の人に携帯で連絡しているようです。それで上の人もあまり利口ではないから、「そうか、よく教えてくれたな」と答えます。要するに任せるということがありません。ですから、マニュアルに書いてない仕事ができないということです。上に聞かないとできないという風潮が、非常に広がっているんじゃないかということを、私は非常に心配しています。

現に、日本は過去において、役人など当局者の自己裁量が過度だったわけですが、最近はだいぶ変わってきています。例を二つ申し上げたいと思います。私は若いとき、一九六〇年代にロンドンにいました。一九六三年に日本政府が戦後初めて英国でお金を借りました。そのときに驚くことがありました。契約書がたったの一ページか二ページしかなかったのです。そうすると、日銀本店からやたらに電報が来て、「こういう場合はどうだ？　ああいう場合はどうだ？」と聞いてくるわけです。それで私が交渉の委員会にその件を持ち出たとき、何という答えが戻ってきたかというと、「まずそんなケースは起こらない。起こったら常識で判断すればいい」と、こう言うわけですね。そういう時代だったのです。

ところがその当時から米国は多人種国家でした。当時の英国のロンドンは一部の紳士の市場でしたから、みんなが常識をもっていると思ってやっていました。だから、たった一、二ページの契約書でもよかったわけです。当時からアメリカの方は何でも書いておかないとすまないというので、日本政府がアメリカでお金を借りたときの契約書はものすごく厚かったものです。それが今も続いている上に、最近悪いことに、アメリカのやり方が英国や他の国にも及んでしまっている状況で、マニュアルと同様に、そう

いうふうに契約書が細かく細かくなってしまっています。

ところが最近私が国際会議に行くと、それがだんだんと反省期に入ってきているようです。「書かれたルールが大事なのか。それともルールの背後にあるprincipleが大事なのか」ということが問い直されるようになってきています。これはぜひみなさんもいろいろな社会生活をされる場合に考えてほしいことです。ルールとprinciple。やはりprincipleが大事だと私は思います。

例えば、各地に駐車禁止のところがありますね。私の住んでいる田園調布では駐車禁止地域に駐車しても、混雑を招いたりしないから、あまり関係ありませんが、お巡りさんは捕まえやすいから、やたらと捕まえるわけです。これはrule basedですね。なぜ駐車禁止があるかというと、交通渋滞を起こすからでしょう。駐車制限のために駐車禁止があるとすれば、そんなところはやまかしく取り締まる必要はありません。ところがどうも今の世の中は、ある種のアメリカ流の多人種多文化だと何でも決めておかなければいけないということから、非常にrule basedに移っています。ここで面白いことに、イギリスからprinciple basedに戻るべきだという動きがあるんです。

みなさんはお若いから、これから生きておられる間にはおそらく、何でもManual based、rule basedの時代から、principle basedになって、そのうちphilosophy basedになるかもしれないということをひとつ考えていただきたいという気がいたします。

そして公私の別ですね。要するに公のことと私を分けるということは、いくら規則があっても構わないので、公私をまぜこぜにしないということも、ひとつの大きな常識だと思います。

七　思いやり

最後になりますが、思いやりについてです。これはよく申し上げますが、人間として何を自分でチョイスできないかというと、どういう時代にどこで生まれるかということですね。私は幸か不幸か、一九二七年に、当時日本の経済があまりよくなかったのに、わりと恵まれた家庭に生まれて、戦争中もちょうど兵役に行く年齢に達しなかったわけですから、生き延びて今日に至っています。これはまったく私の力が及ばないことです。それだけに恵まれてきました。

だけど、その恵まれた人たちも、恵まれた人たちだけでは生活はできません。やはり恵まれない人も世界で活動しているからこそ、恵まれた人もこうやって生活できるということではないかと思います。これは国でもそうでして、ある国だけが繁栄することはできません。

その一例としては、第二次大戦が終わったときに米国は断然強かったわけです。米国だけが繁栄していました。米国は、真珠湾攻撃はありますが、9・11テロまでは本土は攻撃されていません。日本の風船みたいなのが行ったという話はありますが、とにかく無傷で終戦を迎えたわけです。では、アメリカだけでその後の世界が存続していたかというと、アメリカの当時の指導者はそういうことは考えていませんでした。やはり世界が復興しなければ、アメリカが今後の繁栄を続けられるわけにはいきません。マーシャル元帥という後に国務長官になった人が、マーシャル・プランというのを出して、ヨーロッパを復興させたわけですね。同様に日本だけで東アジアで繁栄するわけにはいきません。やはり周りの国が繁栄しなければ駄目なわけです。

ですから、やはり生まれる時代や場所はまったくの偶然ですが、こうやって慶應義塾で学ばれて、私

の話を聞く余裕があるということはよほど余裕があるということだと思いますので、いずれにしても、何もいつも貧しい人や困っている人のことを考えている必要はないけれど、これは必ず考えていただきたいと思います。

これについても二つのつエピソードがあります。石油王のロックフェラー家の家訓というか方針では、「収入があったときに三分の一は自分で使い、三分の一は貯蓄し、残りの三分の一は慈善に使う」というのがあります。こんなことはロックフェラーだからできることで、そんなことをしたら、食べていけませんと言う人は別ですが、そういう気持ちを持ってほしいと思います。

また、例えば自分のところだけ良ければ、そのままうまくいくかというと、そうはいきません。例えば中国のように沿岸部は発展しているけれど、内陸部はあまり発展していない国があります。日本は非常に生活が楽だけれど、周りの国は良くないという状況では、過度の人の動きが起こります。それが問題をまた起こすというわけです。ある場合には難民だったり、ある場合には人身売買が起こるというようなこともあります。世界中が平等で豊かな世界というのはすぐにはできないけれども、やはりそういう方向に向かって努力することが非常に重要なのではないかと考えます。特にこういうところで、私の話を聞きながら、恵まれてないと思っておられる方はたくさんいらっしゃると思いますが、しかしこれだけの余裕があって、勉強することができるということは、恵まれているということなので、そのことを是非忘れないでいただきたいと思います。

私は結婚式に呼ばれると、必ずこう言います。「こういうふうな婚礼を挙げられるということは、どれだけ恵まれているかということを考えてほしい」と。ぜひ、これは最後にお願いとして申し上げたい

と思います。

私は今七つのお願いを申し上げましたが、繰り返しますと、一つ目は intellectual curiosity をもってほしい。二つ目は人の意見にできるだけ耳を傾けてほしい。三つ目は必ず自分で考え直してほしい。それから四つ目には、自分の意見なり質問なりをわかりやすく簡明に表明することが必要だということ。五つ目には、常に心に余裕を持ってほしい。六つ目には、大きな常識を養ってほしい。最後に、自分がこの時代に、こういうところに生まれて、慶應義塾大学で学んでいるということは非常に恵まれているということ、そして恵まれない人のことをときには考えてほしいということで、ここで私のお話は終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

質疑応答

Q1　学生A（理工学部一年生）　講演、ありがとうございました。お年を感じさせない元気な口調で、自分もこういうふうになれたらいいと思いました。

今の日本は、経済にしても政治にしてもアメリカの言うことをなんでも聞いているような印象を受けますが、これからはそうではなくなると思います。緒方さんは、銀行家として経済の点から見て、これからの日本はどうしたらいいと思っていらっしゃいますか。お考えをお聞かせください。

A　戦争が終わるまでは日本は非常に孤立していて、戦後は外国から学ばなければならないことが多かったので、政治的にも完全に独立していませんでした。今でも完全に独立しているかどうかは異論のあるところでしょう。経済面から言いますと、グローバリゼーションということで、一国だけで経済が存続することはできませんから、ますます外国との交流が深まるし、交流が深まれば、ある種の共通のrule や principle に従っていかなければならない。それを外圧と思うかどうかは別問題なんですが、私は外圧ではないと思います。

　先日ポーランドに行きました。ポーランドはやっと欧州連合に入ったのですが、むしろ欧州連合のルールをうまく利用して、国の内部を改革したいと思っているようです。日本も昔はそういう時代がありましたが、日本は、ある意味では自信がなくなっているところもあります。最近では、これだけ経済力が強くなって、何も外国のやり方がすべて正しいわけではないと言う意見も出てきました。その意見が間違っているわけではありませんが、やはり経済面では自分たちの特殊な面も述べながら、共通のルールを作り、守っていく方向で行くべきだと思います。

　政治も同様だと思うのですが、日本の歴代の政府を見ていると、どうもアメリカだけに遠慮しているように見えます。「あなたの知らないところで、アメリカに対しても十分に言っているんだ」と言う人もいますが、私はあまりそうは思わない。今度安保理事会のメンバーになるというときに、あまり世界中からサポートがないのは、要するに日本が入ったところで、ブッシュ政権と同じことしか言わないのではないかと思われているわけです。そう言われることに対して、ＮＯと言えるだけの勇気があるのか。もしくは、それに対抗する意見を持っているのかというと、そこは非常に疑問です。

だからさっき申し上げたように、「日本は一体何を考えているんだ」と言われるわけです。私は何も外国に常に楯突けとは申しませんが、やはり日本なりの政治的な考え方を持っていたほうがいいと思います。その証拠に、例えばアメリカとあんなに親しいカナダやドイツは、日本よりももっと効果的にアメリカに意見を述べているわけです。日本も政治面では、そういうふうにやっていかなければいけないのではないかと思っています。

どうも歯痒くて仕方がない。というのは、今日本には主たる考え方が二つあって、ひとつはアメリカさえＹｅｓと言えばいいというような考え方、もうひとつは何でもアメリカなり中国なりに楯突けばいいという考え方です。これでは、なかなかバランスのとれた考え方を持った人が出てきません。いるとしても、指導者の中にいないということが心配です。ですから、私は今の指導者にあまり期待をかけておらず、みなさんに期待したいところです。

Q2　学生B（理工学部一年生）　今のお話で、現代社会におけるアメリカ中心ということがありましたが、アメリカ中心の極端な自由主義の中で、日本も二極化に向かっていると思います。私は二極化というのは必ずしも正しいことだとは思いません。アメリカを中心にそうした考え方が世界中に蔓延している中で、日本の取る立場が重要になってくると思うのですが、日本はどのような政策を取り、どのような考え方を世界に向かって主張していくことが必要だと思われますか。

A　国内については、経済的・社会的にそれほど二極化していないと思います。国内の方から言いますと、私は社会的・経済的には貧富の差が少ない社会であってほしいと思います。それは制度的にもそう

だと思うのですが、思想的にはもっと個人主義的というか、自由闊達に考えを述べるような社会であってほしいと思います。これがどうも日本はそうでないような気がします。つまり何となく世論というものができますと、異論を述べにくいような社会ですね。だからこれをもっと異論を述べやすい、もっと肩を張らずにリラックスした格好で異論を述べられるようになるには、やはり学校のときからそういう習慣をつけていかなくてはいけないと思います。

海外については、実際上世界は二極化しているのか、していないのか。先日こういう議論がありました。ヨーロッパは三つに分かれているという説があり、つまりブッシュ政権とほとんど歩調を一緒にしていた英国とイタリア、批判的なフランスやドイツ、そしてどちらかと言えば独仏に批判的で英国とイタリアに近いと言われる東ヨーロッパの三つがあると言われています。ところがある人が言うには、「ヨーロッパの民衆はみんな実はブッシュ政権に批判的なんだ。三つに分かれているのは実は政府だけだ」と。こういう意見もあるのですね。このように、いろいろな意見があるわけです。今後は多極化の社会でありながら、お互いに話し合えるというところにもっと近づいていかなくてはいけないと思います。

では、今の日本の当局がそういうことを十分にやっているかというと、私は非常に批判的です。しかし、今後はやはり一国中心主義ではなく、多国間の話し合いや協調が必要だと思います。その場合に一番重要なのが、英語で言うとengagement。ごたごたしていればしているほど必ず話し合いをする。つまり日中間の仲が悪ければ悪いほど、いろいろなレベルで話し合いをするということをやっていく以外にないと思います。だんだんその方向に動いているようにも思われます。ある国が経済的に他の国よりも大事だということはありうることですが、やはり一国中心主義では、短期的にはともかく、中・長期

的には世界の平和は望めないと思うので、そういう方向で努力していくべきではないかと思います。

Q3　学生C（理工学部一年生）二極化で一番問題なのが、政治を動かす人というのが基本的に富裕層であり、そういう人たちが自分の子孫までずっと裕福でありたい、という願望を持っていることだと思います。彼らが世界全体を二極化に持っていこうとしていると思うんですが、それを回避するための動きはあるのでしょうか。

A　私はその点を非常に心配しています。日本は長い間保守党が政権を取っていましたが、大阪万博の頃を境にして、議席が事実上世襲化されているところもあります。私はよく冗談で言うのですが、このまま放っておくと、日本の社会は〝政治家のいるファミリー〟と〝政治家のいないファミリー〟に分かれてしまうのではないでしょうか。政治家のいないファミリーの人は政治の議論はするが、政治にだんだんと関心がなくなってしまう。一方で、反対党はどうなるかというと、非常に若いうちから政治家になってしまうわけです。つまり、政治というものが職業化するということです。昔は実業家として、経済人として、法律家として大成した人、あるいは役人としてかなりの役職まで行った人がそれなりの識見を持って、途中から政界に入ったケースが多くありました。このようなケースは、今は非常に少なくなっています。要するに保守党のほうは世襲、反対党のほうは非常に若いうちから職業的政治家や政治屋になってしまう、ということが起こりつつあり、私はそれを心配しています。

　これを解決するひとつの方法は、親族の選挙区から出ないことです。子どもが政治家になってはいけないということを決めるのは憲法違反で、これはできません。それに家庭で政治の話をしていれば、子

どもが政治に感心を持つのは当たり前のことだと思います。この会場にも、科学に興味を持った、科学者のご子息やお嬢さんがいるかもしれない。しかし、政治家の場合、親の地盤から出るべきではないのです。だから、法律で決めることではないけれど、例えば親の選挙区から出る人は、そこの選挙区の候補者として党が公認しない、というようなことをすべきではないでしょうか。そうしないと、本当に世の中で一番優れてない人ばかりが、政界に行ってしまうような気がします。私はこれを非常に嘆いています。すぐには直らないでしょうが、ひとつの対策はこういうことだと思います。

それからもう少し言えば、当選回数が多いことが、大物と思われないようになればいい。昔は、経済人だったり、法律家だったり、ジャーナリストだったり、官僚だったりした人が五十歳ぐらいで指導者として政界に入ってきていました。今なぜ入って行かないかというと、その頃になって入っても、当選回数が一回だけだと二等兵としてしか扱われないからです。だから馬鹿馬鹿しくなって、誰も五十歳過ぎてから政界に入らない。政治家から権限を奪うことはできませんけれど、そういうものはやはり直していかなくてはいけません。

それに、かつては官僚にもっと専門家としての見識があったと思います。今、若い官僚が何を怖れているかというと、政治家に怒られることばかりを怖れています。もっと「おれは専門家だ」という気持ちがあってもいいと思います。

Q4　学生D（大学院一年生）　緒方さんは日本銀行で、日本円が一ドル＝三六〇円の固定相場から変動相場へと移り変わるところを、実際に手がけてこられたというお話でした。その中で日本経済がずっ

と成長を続けたのは、すごいことだと思います。まず、質問の第一点は、緒方さんがどういう要素に重きをおいて、固定相場から変動相場に移行させていったのかということです。

さらにすごいと思うのは、緒方さんの奥様が、あの緒方貞子さんでいらっしゃることです。貞子さんは世界のキャリアウーマンの中でもトップにいらっしゃる方だと思うのですが、女性が社会に進出するときに大変だと思うこと、反対に女性のほうが男性よりも有利だと思われることなど、奥様を身近でご覧になって、感じられたことはありますか？

A　最初の、為替相場でどうやって政策を運営してきたかという質問につて、私の答えは非常に貧弱なものです。当時は私どもが率先して政策を行なってきたというよりも、やはり経済と為替市場の動きに押されてしまった面が強い。だから簡単に言えば、一九六八年の始め頃から日本は既に黒字国になっていたので、為替市場で一ドルが三六〇円では安いのではないか、という動きが出てきたわけです。そうなると、相手方になるアメリカはどんどん赤字が多くなっていきます。実のところ、そういうふうな為替市場の動きにどうやって対応するかで、精一杯でした。

最初に三六〇円から三〇八円になったときには、各主要国の当局が集まって決めるだけの力がありました。ところが二年後に変動相場になったのは、どの政府もどの相場が的確かということを決める力がなくなってきていたのです。ただし市場に任せても、すっかり任せきることはできません。余ったドルを買う、足りないドルを売るという「介入」をやっていました。でも、基本的には市場に任せざるを得なくなったということです。第一の質問に対しては、当時は国内外の経済に波乱が起きないようにすることで精一杯でした、とお答えするよりありません。

二番目のご質問ですが、これは非常に難しいですね。子どものころから共学だったこともあって、私は実際に女性の活動に対して非常にサポーティブだと思います。お嫁さんになる人が働いている方の結婚式などに呼ばれますと、挨拶する人のなかには「働かないで家庭を築け」なんて言う人がいます。そうすると私は逆に「働いておられて、これからどうされるか知らないけれど、家庭を持ちながら働く女性がいたら、その職場の同僚は少しでもいいから〝あなた早く帰ったらどう?〟というように配慮するだけでも違うのだ」ということを言っています。

男女の強み・弱みという問題は難しいところで、いろいろな説がありまして、うちの家内の話ですと、女のほうがずいぶん有利な場合もあると言うことです。国際的なポストには、男ばかりでなく、ここには女性を据えなくてはいけない、というところがあります。女性の強みはそういうところにもあるのかなという気がしますね。

それから私の家庭について言えば、もうひとつの強みは、私は引退していますが、家内はまだ働いているということです。それが強みなのだろうと思います。つまり、逆に言うと、私がこれまで育った社会では、男の方が職業生活をあっさり終えてしまって、女性はそれに反してチョイスがある。もちろんみなさん同じパターンではないと思いますが、結婚する前に働いたり、結婚してしばらく家庭を作ってからまた働けるとか、却って男の人よりもチョイスがあると思います。それを大いに利用された方がいいのではないでしょうか。男女のどちらかが強いとは思いません。

Q5　学生E（理工学部二年生）　講演の中で七つのキーワードを挙げられていましたが、私の中でピ

ンと来なかったのが、六つ目の「大きな常識をもつ」ということです。これはある事柄にぶつかったときの判断条件などを立てるということだと思うのですが、これについてもう少し詳しくお聞かせいただきたいと思います。

A　これは何と言いますか、「こっちがいい」、「あっちがいい」と答えられないことが常識なのだと、私は思うのです。実は私の亡くなった一番上の兄は、いろいろとやかましい人でした。正義派というか、つまらないことにばかりにやかましい。この兄について、私の父が「もっと大きな正義派でなくてはいかん」と言ったこともあります。だから、ひとつの意味は、何が大事で何が大事でないかということを見極めることが必要だということです。どうやったら見極められるかというと、経験を積んだり、あるいは人の話を聞いたり、本を読むなどが挙げられます。本を読むならば、特に伝記です。何も政治家の伝記を読む必要はないけれども、いろいろな人の経験を学ぶことが、大きな常識の基礎になると思うのです。

例えば、内部告発する人がいると、そのコミュニティは滅茶苦茶になってしまいます。だからといって、何でもかんでも隠していればいいというわけではない。ですから、そこのところは説明があいまいになって申し訳ないのですが、何が大事であるかということは、その場によって違うのではないかと思います。年寄りの方が若い人よりも若干優れているとすれば、その点ではないかと思います。経験を積むことが、一番の近道ではないでしょうか。

私は、英国にいたときのたった二ページの契約書の時代が懐かしくて仕方ないんですよ。この間ワルソーで会議があったときに、英国人の人が来ていまして、私が一九六二、三年頃に英国にいて、そ

ういう時代だったと言ったら、「いい時代だったけれど、その時代はもう戻ってこない。あのころはgentlemanの社会だった。ロンドン・シティにある程度の教養をもった人たちが集まってやっていたので、お互いに大変な信頼関係があった」と言われました。今のような多文化・多人種、多角化している社会ではなかなかそこには戻らないと思いますが、やはり時々戻ってもいいのではないでしょうか。つまり何が大事か、何が基本か、何がprincipleかということを時々考え直していかなくてはいけないと思います。

Q もうひとつ質問ですが、今のお話の中で、大きな常識を育てるためにはやはり経験が必要だろうということでしたが、私もその通りだと思います。しかし、その過程では成功や失敗などいろいろな経験があると思います。ちょっと大げさな表現かもしれませんが、日本の社会全体がそうした失敗を許さない雰囲気がある気がします。もしかすると、緒方さんの言葉をお借りするならば、社会全体に余裕がないからではないでしょうか。もしそうであるとすると、社会が余裕をもつためには、緒方さんはどういうことが必要だと思われますか。

A 失敗に対して非常に寛容でないと言うのは、おっしゃる通りです。失敗すると、その人はまったくいけないと思われるのでしょう。特に私らのように、大学を卒業して就職した人に対しては、評価も減点主義ですよね。得点主義ではない。そういう時代を続けてきたわけです。だから失敗に非常に厳しいのだと思います。

アメリカなどは失敗はむしろ成功のもとと考えて、非常にある意味では余裕がある。あるいは寛容です。失敗した人でも、敗者復活戦のチャンスが数多くあります。だから、日本も社会としてそういうふうになっていかなくてはいけないと思うんですが、どうなるでしょうね。私らのときのような終身雇用

とは言わないまでも、長期雇用制度がどの程度続くのか。それからモビリティがもっとある社会になるのかどうか。なかなか一概には言えませんが……。私は、人を評価する人が、失敗を前向きに捉えるようにすべきだと思いますね。そうしないと、減点主義になってしまいます。

少しお話が変わりますが、私はある留学生の試験制度に関わっているのですが、人文科学と社会科学について、両方ともひとりの先生が選ぶ仕組みになっています。そうすると、欠点としては不公平が起こってきます。不公平が起こるというのは、いい志願者が落とされる可能性があるということです。

ところが私にしてみると、この方法は得点主義なんです。できる人を先生が選べるわけです。この状況で試験官が三人いてご覧なさい。必ず、お互いにA先生が甲という生徒がいいと言うと、B先生は乙君がいいと言って、お互いに相手をほめているうちはいいけれど、そのうち「あっちは駄目だ」「こっちは駄目だ」という減点主義になる。ところがひとりの人が選ぶとそのあたりを自分の判断でしてしまうから、不公平で落ちる人がいるかわりに、留学生制度としては実に良い人を選べるのです。私はその留学生の歓送迎会で挨拶をさせられるときには、「日本ではあまりにも減点主義なので、ここではこの得点主義をぜひ続けてみてください」と言っています。

でもこれもなかなか難しいですね。そういうことをやっているところは、大抵そう言っています。それで三人ぐらい試験官がいると、またなかなか決まらない。結局、無難な人が選ばれます。就職もそうですよね。だから非常に難しいと言えます。

Q6　学生F（研究生）　七つの項目のうち最初に挙げられた、「どんなことにも知的好奇心をもて」と

いうことについて質問します。日本人と海外の学生を比較した場合、海外の学生は理工学部の学生であっても、経済や政治などに関心をもっていると思います。日本の学生は政治経済に関心が低いのではないでしょうか。この原因は何にあると思われますか。

A　これについては、よくわかりません。まず海外の方に言わせると、日本から来る経済学者は非常に深くよくできるそうですよ。しかしそれを広げて考えない。海外の研究者の方は自分の専門分野のみならず、いろいろなことに興味をもっていますからね。ですからやはり他のことに興味を持たないと、いくら関心が深くても、伸びないのではないでしょうか。

それからもうひとつ、これは日本の社会に関係があると思うんですが、以前以上に社会が縦割りになってきています。これは仕事でもそうです。私がいた日本銀行だって、日本銀行の人は財務省がやったことで影響を受けています。財務省のことをいろいろと言えばいいのに、何も言わない。どうしてかと言うと、こっちが向こうのことを言うと、向こうからも言われるからです。こっちが言わなくとも、向こうは言うのなら、言えばいいではないかと思うのですが、そうもいかないようです。

それは企業でも同様です。学校も、縦割りかもしれませんね。interdisciplinary に必ずしもなってないということかもしれません。ですから、組織まで変えるわけにはいかないかもしれないけれど、人間個人としては、広い視野をもったほうが、関心を深めたときに伸びるのではないかと私は思います。理工学のことは知りませんが、経済学の先生の話などを聞くと、そう思うのです。

今おっしゃったように、海外から来た人はいろいろなことに関心を持っているでしょう。私が留学を勧めるのは、留学をすると、例えば生活の場、あるいは学校を通じて、自分の専門ではないことも学ば

ざるをえなくなるわけです。それが同じ学部にだけいると、それがますます〝微に入り細を穿つ〟になってしまう。そこでひとつ是非、intellectual curiosityを持っていただきたいと思います。なぜintellectualと言ったかというと、ただの好奇心をもって、やれ次の長者番付の一等がどうだ、ということでなく、知的好奇心をもってほしいということです。知的好奇心というのは学生でなくては持てないと思うからです。